

【原著】

進学重視校における進路指導と推薦／AO入試

—A 県県立高校の『進路指導資料』を手がかりとして—

大谷 奨（筑波大学）

本稿は一つの県を事例として進学志向の高い県立高校 12 校の『進路指導資料』からそれぞれの学校の推薦／AO 入試に対するスタンスを検討するものである。地方部では一つの高校が多様な志望を持つ生徒を抱えており、その進路実現のため入試の多様化を積極的に活用している一方、県庁所在地にある高等学校は目標とする大学や進学方法が学校間で役割分担されていた。しかし難関大学への進学を重視する県庁所在地高校でも徐々に推薦／AO 入試を活用する傾向にあることが確認される。

1 はじめに

入試の多様化は高等学校の進路指導にどのような影響を与えているのか。とりわけ推薦／AO 入試の導入が進むにつれ、教科指導主体で一般入試に対応してきた進学志向の高い高等学校（本稿では、進学重視校）はこれに対しどのように対応しようとしているか。

筆者は、高校が大学入試の多様化に対応するため、進路指導をどのように変容させてきたのかを探るため、二つの高等学校の『進路のしおり』（高等学校が生徒用に編集している進路の情報冊子）の内容の変化について検討した¹⁾。その際事例とした伝統的な進学重視校の『進路のしおり』は、この 20 年間で面接・小論文対策といった推薦／AO 入試を意識したコンテンツが加わっていったため、頁数が倍増しており、進学重視校においても一般入試を念頭に置いた学力試験主体の進路指導だけではなく、次第に推薦／AO 入試やそこで課される選抜方法への対応に迫られていることを看取することができる。

しかし進学重視校の推薦／AO 入試に対するスタンスはまだ明確には定まっていないと思われる。例えば筆者が、平成 19 年 3 月に行った面接調査では、ある県立高校の進路指

導担当教員は「今後 AO 形式の募集人員が増えてくるであろうから、対応策を検討」したいが「国公立の場合には何を基準としているのか、何を準備すればよいのか分かりかねている」と語っており、対応しあぐねている様子であった²⁾。

その一方、例えば首都圏のある進学指導重点校の『進路のしおり』は、推薦／AO 入試の説明やその対応についての記述がほとんどなく、あったとしても「本校生徒の志望する大学の（AO 入試での・筆者註）合格は非常に難しいのが現状」と述べ、できるだけこれらを生徒の視界から遠ざけようとしている。進学志向の強い高校どうしても推薦／AO 入試に対するスタンスは様々であることが予想されるのである。

そこで本稿では、複数の進学重視校の同じ年度の『進路のしおり』を比較することで、それぞれの学校がいま現在置こうとしている推薦／AO 入試に対する「距離感」を探ることを試みる。具体的には A 県を対象事例として、県内各地域の高等学校 12 校の平成 21 年度『進路のしおり』（以下、事例県での通称にしたがい『進路指導資料』）を収集し、その内容を検討する。検討に際しては収集時

に行った進路指導教員の聞き取り調査も随時活用する。なお今回の12校は平成17年度より進学目標達成事業としてA県で実施されている「高等学校における進学希望生徒の大学進学率向上対策」の指定校である。またA県では大学進学率の高い高校の一群を「県内16校」と通称しており、今回の12校はこれにも含まれている。今回の事例校はA県各地を代表する進学重視校とあってよい。

2 事例県・事例校の概略

2.1 A 県の環境について

A県は人口約140万人。農林水産業を主体としている。また面積が広大であることから県庁所在地に加え総人口に対しては比較的多くの中核的都市を抱えている。一方で県南と県北間の経済格差が長年問題となっており、北部の進学重視校は県の人材育成事業の支援を受けている。

高等学校の8割以上は県が設置者であり、県立志向が強い。また予備校などの受験産業が他県に比べると発達していないことから、生徒の学習・進路指導は高等学校がほぼ単独で担う。さらにどの高校も部活動が盛んであることから、今回の12校は文武両道を旨とする典型的な地方の進学校といった趣を呈している。

進学先としては、各高校ともA県が所属する地域ブロックにある旧帝国大学、県内国立大学、県立大学の3大学を主要な進路先と定めて進路指導を展開し、自校の進路実績の報告や他校との比較の際、この3大学（以下、主要3大学）の合格者数は有力なインデックスとなっている。

2.2 事例高等学校について

今回対象とした12校のうち、5校は県庁所在地にあり、残りの7校は地方主要地に点在している。ここでは県庁所在地の5つの高等学校を、県庁1、県庁2…県庁5、地方の

7高校を地方1、地方2…地方7としておこう。平成20年度の主要3大学の現役合格者について、旧帝国大学合格者数を第1優先、県内国立大合格者数を第2優先として降順で高校を整理したのが下表である。

表 高校別主要3大学の合格者数

	旧帝大	国立大	県立大
県庁1	54	25	2
地方1	24	47	9
県庁2	20	70	18
地方2	14	20	10
地方3	11	26	9
地方4	7	11	12
県庁3	3	44	35
地方5	3	23	15
県庁4	1	57	28
地方6	1	18	10
地方7	1	12	10
県庁5	0	9	12

これを見ると、県庁1がA県内ではトップ校で、それに続く県庁所在地高校群の間に、各地の進学重視校が入り込む、という位置関係となっていることが分かる。また上位層に注目すると、県庁所在地の高校は、旧帝大合格者がきわめて多い県庁1のような高校と、県庁2、県庁3のように旧帝大合格者もいるが、それ以上に県内国公立大学合格者の比率が大きい高校、というように高校間での進学傾向の違いを見て取れる。それに対し、地方1～4は主要3大学それぞれに一定の合格者を輩出している点で類似した進学傾向にあることがわかる。つまり、県庁所在地では高校間で緩やかな役割分担ができており、その一方、地方の比較的人口の多い地域の高校では主要3大学すべてに一定数の合格者を出している。

このような合格者輩出傾向の違いは、それ

それぞれの高校における進路指導のあり方と密接に関係しているものと思われる。実際に『進路指導資料』のコンテンツからその確認を試みる。

3 『進路指導資料』のコンテンツ

3.1 全体的な傾向

他県の『進路のしおり』と同様に『進路指導資料』には前年度の大学合格実績が掲載されているが、A県では別表で主要3大学の合格者数を再掲するが多い。さらにいくつかの高校では「県内16校」の大学合格者数も併載しており、県内の進学重視校における自校のポジションが把握できるようになっている。

またほとんどの学校では受験に関する「年間スケジュール」と「年間進路指導計画」が掲載されており、願書を出す時期、校内模試や三者面談の大まかなスケジュールが示されている。

さらにいくつかの高校は、校内模試などの学内成績とセンター試験の得点、あるいは大学合否との関係についての情報、センター試験、二次試験の問題分析など教科指導につながる情報を載せている。

なおほとんどの高校は巻末あるいは別冊というかたちで合格体験記を掲載しているがこれについては別項で検討する。

3.2 推薦／AO入試に関する情報の取り扱い

ではこれら『進路指導資料』において推薦／AO入試はどのように受け止められているであろうか。まず大学合格者一覧における推薦／AO合格者の取り扱いを見てみよう。これらの入試での合格者を一般入試と分けて掲示している高校は6校（県庁2，地方2，地方3，地方4，県庁3，県庁5），主要3大学合格者中の推薦／AO入試合格者数を別掲している高校が2校（県庁4，地方7）である。かなりの高校が、自分の高校から（少な

くとも主要3）大学に入った者のうち推薦／AOで合格者が何人いるのか、『進路指導資料』を開くと直ちにわかる構成となっている。

7月の入学者選抜実施要項発表から、後期日程の入学手続きまでの年間受験スケジュールを載せているのは7校（県庁1，地方2，地方3，地方5，地方6，地方7，県庁5）であるが、これらすべての高校では11月から国公立で推薦／AO入試が開始されることを記載している。

他の高校もこの種の情報は別途プリントなどで生徒に流していると思われる。ではそのスケジュールに沿ってどのような指導計画が示されているか。『進路指導資料』に年間進路指導計画を掲載している学校は9校であったが、うち7校（地方2，県庁3，地方5，県庁4，地方6，地方7，県庁5）は計画表に例えば以下のような推薦／AO対策指導を組み込んでいる。

- ・ 7～8月：推薦入試の志望理由書作成（地方2）
- ・ 9月：小論文・面接指導（県庁4）
- ・ 10月：推薦入試志望生徒への指導（地方5）
- ・ 10～11月：推薦入試面接指導・小論文指導（県庁5）

このような推薦／AOに関する指導計画については直接掲載せず、必要に応じて別途生徒に周知している高校もあるであろう。それゆえ、最初から『進路指導資料』という生徒全員に配付する冊子に掲載していること自体が、その高校がより公式な水準で推薦／AO入試を考えていることを示しているという点で大きな意味を持つ。

実際上記の高等学校の聞き取りでは、「推薦やAOについては3年生の6月のオリエンテーションで全員に知らせる」（地方2）、「AO推薦については受験生が多いので学校を挙げて行う」（県庁5）、「推薦AOにつ

いては受験が増えているし、そのような傾向になっていくと認識している」（地方5），「（中学生が）AO推薦についての指導があるということを期待して入学してくる」（県庁3）といった応答がみられ、推薦／AO入試の存在が顕在化した状態を前提とした進路指導が行われているといえる。

さらにそれぞれの『進路指導資料』が推薦／AO入試について項目を立てて解説しているかどうかを確認してみたい。「推薦入試・AO入試について」といった独立した項目で説明している高校は5校である。うち4校は先の年間指導計画に、推薦／AO入試の指導を組み込んでいる高校である（地方2，地方5，地方6，地方7）。残りの1校は県庁1であるが、この高校は『進路指導資料』では推薦／AO合格者を明示せず、年間指導計画も教科指導や模試といった一般受験に対応する行事に絞って掲載している。一見、『進路指導資料』の構成上からは、県庁1は推薦／AO入試と距離を置いているように思われるが、その高校が「AO・推薦入試制度概要」という項目を設けて解説しており、加えて個別大学の選抜方法を掲載していることが注目される。

またこれに加え、県庁1と地方2は推薦／AO受験生からの報告をもとに「小論文・面接の実例」「受験報告書」を掲載し、小論文のテーマ、形式、試験時間、面接の形式（面接員の人数、室内の配置）、質問内容などが在校生に伝わるようになっている。県庁1はさらにこれらの報告からまとめた「面接で受かるポイント集」も載せている。地方2が推薦／AOに積極的に対応しようとしていることは先に述べたが、県庁1が持っている推薦／AOとの「距離感」は『進路指導資料』のみではつかみかねる。これについては聞き取りの結果を踏まえて、再び言及する。

3.3 合格体験記の掲載方法に見られる推薦／AO入試の位置づけ

今回検討した12校のうち9校では『進路指導資料』の巻末に、あるいは別冊として卒業生の合格体験記を載せている。その体験記で推薦／AO合格者の手記がどのように取り扱われているのかについて着目してみよう。

まず入試区分を明記せずに単純に合格者の手記を羅列的に掲載している高校がある（地方1）。この場合、それぞれの手記の内容を読まなければどのような入試で合格したのかわからない。また入試区分にかかわらず混合して掲載しているが、学校側で一般、推薦、AOといったように入試方法を明記している場合（地方5，県庁5）や執筆者が任意で記載している高校（地方2）がある。

しかし大半の高校では入試方法別に合格体験記を分けて掲載している。その掲載順序については、一般→推薦／AO（または文系理系に分けて一般→推薦／AO）としているのが2校（地方6，地方7）である。これはセンター試験を受けて前期後期を受験するというルートを主流として考えているからかもしれない。そうであるならば、逆に推薦／AO→一般という順で合格手記を掲載している県庁1，県庁3，県庁4についてはどのように考えればよいであろうか。

単に推薦／AO→前期→後期と受験時期の順番で編集したままで、とりたてて意図はないことも考えられるが、県庁3の元教員（現在は地方5の校長）から以下のような趣旨の発言を得ている。

すなわち、高校全体で推薦／AO入試に力を入れた結果、このような入試を意識した指導の方が実は高校教育らしいのではないかと教員が感じ始め、また生徒も印象深い高校生活となるようだったので、推薦／AO入試の合格体験記を先に掲載するようにした。

つまりこの高校は、推薦／AO入試の存在を校内に強調する意図を込めて『進路指導資

料』を編集したということになる。実際この高校は「県内 16 校」中、推薦／AO では県内国立大学に最も多くの合格者（14 名）を輩出しており、その人数は一般受験を含めた合格者の 3 分の 1 を占めている。今回検討した 12 校のうち、最も推薦／AO 入試に近いスタンスをとる高校の一つとあってよい。

4 進学重視校における進路指導

4.1 進路指導の「二重性」

このように『進路指導資料』からは、高等学校によって推薦／AO 入試との距離感が多様であることを伺うことができる。上記県庁 3 のような高校がある一方、難関志向の高い高校（例えば地方 1，県庁 2）は『進路指導資料』の内容のほとんどは一般入試に関連するものであり、推薦／AO とは距離を置いているようにも思われる。

しかしそれをもって直ちに推薦／AO を敬遠していると考えるのは早計であろう。確かに聞き取りでも「きちんと勉強させれば伸びる生徒が多いのでできるだけ第一志望にこだわらせる」（県庁 2）、「（推薦／AO の）情報は 1，2 年の時にはあまり与えないようにする」（地方 1）と前置きするが、実際には「AO 推薦も第一志望にそれがあれば利用する」（県庁 2）、「第一志望であればチャンスが増えるという意味で割と積極的に声をかける」（地方 1）と、志望大学の受験機会を拡大する手段として選択的に用いる姿勢も見せている。

これを裏付けるように、合格体験記では「推薦のお話をいただいたのは夏でした…先生は根気強く説得して下さい、私は挑戦を決意しました」、「（体験記を）書けることを大変嬉しく思っています…AO を勧めて下さった先生を始め、様々な面でご指導して下さいました先生にはとても感謝しています」（地方 1）と記されており、適当と考える生徒に対しては学校側から推薦／AO 入試を勧め、

また指導している様子が確認できる。

ここには、生徒全員が目にする『進路指導資料』という公式の場ではできるだけ明示を避ける一方、個別指導のレベルで選択的に推薦／AO を（場合によっては積極的に）用いる、という推薦／AO に対する進路指導の「二重性」を指摘することができる。

実は本稿冒頭で示した、推薦／AO を「生徒の視界から遠ざけようとしている」首都圏の高校でも、合格体験記には「（エントリーシート作成のため）毎日の如く夜遅くまで国語科 I 先生と美術科 N 先生に付き合ってもらい…両先生本当にお世話になりました」とあり、進学重視校では公には推薦／AO と距離を置きながら、実際に受験者が現れた場合にはかなり手厚い指導を施しているという点で共通している可能性が高い。

では A 県のトップ校である県庁 1 ではこの「二重性」はどのようにおさえられているであろうか。すでに見たようにこの高校の『進路指導資料』は一見すると一般入試用にできているが、実際には推薦／AO の概要、面接ポイント、面接例などの情報も豊富に掲載されている点で県庁 2，地方 1 とは異なる。また聞き取り調査でも、教科指導を「二次試験に対応できる学力を身につけさせること」を教科指導の主軸としながらも、「推薦／AO については医学部、旧帝大については志望者自体も多いので積極的に受けさせる」ことが明言されていた。そのためもし推薦などを受験するのであれば「教科の代わりに小論文や面接があるのでなく、+αとして小論文面接を受けなければならない」という「心の準備」を生徒に強く求めているという。実は県庁 1 から旧帝大に進学した生徒の 3 割弱は推薦／AO の合格者である。この高校では進路指導の「二重性」が教師と生徒によって共有されている、という見方もできる。

4.2 進路指導の多様化と多忙化

その一方で、始めから生徒に対して推薦／AO入試の存在を知らせながら進路指導を進める高校がある。県内国立大学に多数の推薦／AO合格者を輩出する県庁3はその典型といえるが、それは県庁所在地では進学重視校間で役割分担が進んだ結果ともいえる。しかし地方になると、広い学力層の生徒が一つの高校に集まることになり、それぞれが志望する大学への進学をサポートするため、一般入試に対応できる学力を身につけさせると同時に、推薦／AOも活用せざるを得ない状況にある。

その中で例えば、「どんな人が向いているのか（コミュニケーション能力など、学力+ α ）を知らせると、自分自身でも気が付かなかった+ α にその子が気づく、掘り起こす場合がある」（地方5）といったように、単に受験手段だけではなく、自己認識を深めるために推薦／AOの存在を活用するという興味深い発言も得られた。

だが様々な選抜方法に対応するということは、当然教師にとって重い負担となる。推薦／AOの対策は一般的には小論文・面接指導という形をとるが、A県の高校では小論文については生徒1～3名に対し教師1名が専任するという徹底した個別指導、面接については担任面接、専門教科教員の面接、進路指導主事や管理職による面接と重層的な指導を施すのが一般的であり、その調整が進路指導教員の役割となる。「10月に入ると面接指導は土日も休みなし。平日も夜7時から11時頃まで」（同上）という発言からは、選抜方法の多様化が教員の多忙化を促していることを確認することができる。

5 まとめ

従来、教科指導に重点に置き、一般入試を主体に進路指導を展開してきた学校でも、推薦／AO入試の存在はすでに無視できなくな

っており、様々な影響を与えている。

伝統的な進学校においても、表だって推薦／AOの存在を生徒に示すことには積極的ではないものの、第一志望の受験機会が増えるとして個々の生徒に対し選択的に受験を勧める傾向が認められた。本稿ではこれを進路指導の「二重性」としておさえておいたが、さらにその構造を生徒に示さないか、生徒に開示して共有してしまうか、で進路指導のあり方が大きく分かれることになる。

その一方、中堅の進学重視校では高校間の序列構造からの脱却を目指し、推薦／AOを学校全体として積極的に活用する事例も見られた。しかもその際、単に進学手段として捉えるだけではなく「小論文指導を全員に行い一般受験希望者にも志望理由書を書かせる」（県庁3）という進路指導の実践に発展したり、「推薦指導によって教科だけ教えているわけにはいかなくなったのはよいことかもしれない」（地方5）という高校教育の振り返りの契機となっている点が特筆される。

受験科目の変更などは教科指導のレベルで対応が可能であるが、多様性が大きい推薦／AO入試に本格的に対応しようとする、授業外や学校全体での取り組みを必要とする。推薦／AO入試を使わざるを得ないのであれば、それをどのように進路指導や高校教育に位置づければよいか、それぞれの高等学校は現在その模索を続けているといえよう。

注

- 1) 大谷奨(2010)「大学入試制度と高等学校における進路指導」『大学入試研究ジャーナル』, 20, 23-28.
- 2) 筑波大学・慶應義塾大学(2007)「『受験生の思考力、表現力等の判定やアドミッションポリシーを踏まえた入試の個性化に関する調査研究』報告書第1分冊」, I-105-109.